

**2020年度 前期授業に関する調査**  
 ～結果の概要と後期に向けての対応策について～

### 1. はじめに

このたび教育の質向上委員会では、学生を対象に「前期授業に関する調査」を実施しました。調査の目的ならびに調査の枠組みは、以下の通りです。

#### 本調査の目的

学生による前期授業の評価を行い、その結果を、後期の教育の質保証・質向上に繋げることを目的とします。

#### 調査の枠組み

	Inputs	Processes	Outcomes
学生 (Client)	* 個人の背景と特徴 ・ 主観的評価 ⇒ 学生課による調査 ・ 客観的評価 ⇒ 教員による電話調査	感染拡大状況下における 学生個人の取り組み	・ 主観的評価 ⇒ 本調査票 ・ 客観的評価 ⇒ 前期の科目評価他
教職員 (Provider)	* 個人の背景と特徴 * 領域・部署の特徴	感染拡大状況下における 個人・領域・部署・委員会の 取り組み	・ 主観的評価 ⇒ 教職員による評価 ・ 客観的評価 ⇒ 本調査票
環境・状況 (Setting)	* 従前の学修環境 * 従前の学生支援の状況	感染拡大状況下における 大学の組織的な取り組み	客観的評価 ・ 学生による評価 ⇒ 本調査票 ・ 教職員による評価 ⇒ 教職員による評価

(\* Holzemer, W. L.が考案したアウトカムモデルを基に作成)

9月18日現在、学生253名から回答が寄せられました。学年別の回答数の内訳は、1~3年生は各学年70~80名程度、4年生は約32名でした。回答全体を概観すると、学生の多くは授業形態の変更に伴う困難さや戸惑いを抱えながらも、徐々に、自らの力や他者との繋がりを活かして、新たな学修環境・学修方法に適応しつつあることが伺われました。一方、従前より、自己効力感・学修への意欲・他者との繋がりが希薄な学生の場合は、平時とは異なる学修環境の変化に伴う、様々な

物理的要因あるいは精神的要因が影響して、現在また今後、学修上の課題がより顕在化することが予測されました。また同一の学生でも、科目の得手不得手や、周囲の状況が異なれば、先述した2つのタイプの学生の特徴を併せ持つことも有り得ると思われました。

以上より、これまでと同様に、建学の精神に基づく“一人ひとりの学生に寄り添った、きめ細やかな学修支援”を、後期も引き続き実行するとともに、平時と異なる状況下においてより支援が必要とされる個人に対しては、一層、支援を強化することが求められると言えます。

以下、後期に向けて教育体制・学修支援の整備、学修環境（施設・設備、図書館・学術情報サービス）の整備について、本調査の結果を踏まえながら、具体的な対応策について述べます。

## 2. 結果（一部）の概観と後期に向けての対応策

今回は特に、質問項目の「講義の内容は理解できたか」「学修に意欲・関心を持ち取り組めたか」「これまでに培った自らの力で学修を自主的に進めることができたか」「授業後の達成感・満足感」「自由な意見や感想」、以上5項目について、自由記述の内容を概観した結果と、それに対する後期に向けての対応策（案）について記しました。

- 1) 講義内容の理解といった点では、自宅において一人で学修する時間が増えたことで「きちんと自分が理解できているのか不安」という回答が認められました。一方、授業の過程で「確認テスト」「小テスト」を受けて即フィードバックを受けることができたことで「理解が深まった」という回答が認められました。

### → 対応策

- \* 授業の過程（授業時間内、開講期間の途中）で「形成評価」を実施することが有用と思われます。これによって、①学生が自ら学修成果を確認できる機会になり安心感が得られること、②個々の学修成果に応じてその後の学修支援を受けるきっかけになり得ること、以上が可能になると考えました。

- 2) 学生の特徴を2つの側面から捉え、対応策を検討しました。まず一つ目の特徴は、既に学修習慣が確立されている場合や、学修方法をこれまでも自ら編み出してきた場合です。このような場合は、授業形態の変更に伴う困難さや戸惑いを覚えながらも、自らの力を活かし、新たな学修環境や学修方法に適応しつつある、あるいは既に適応できています。

### → 対応策

- \* 自らの力を活かし学修を進めることができている場合は、学生の力を保持・強化するために、学修成果を保証・支持する等の肯定的評価を、随時、フィードバックしていくことが必要かと思えます。また学生に精神的な余裕があり、周囲に学修で困っている友人に配慮や支援ができる場合は、教員と協働してその友人を支援すること（「ともべん」サポーターの役割）を促すことで、双方の学生にとって益に繋がると考えられます。

二つ目の特徴は、学修方法が未だ分からない場合、学修方法を誰にも聞けない・相談できない場合です。このような場合は、「周囲がどのように学修しているのかが分からない」ことに因る不安が生じていることを示す回答が認められます。

→ **対応策**

\* 学修上の困難さ（学修方法が分からない、友人・教員にも聞けない等）を抱えている学生には、これまでと同様に学修支援部門による個別の支援を継続して頂きます。

一方で、本調査に未回答の学生、学修支援部門による個別支援にも含まれていない学生の中にも、真に学修上の問題を抱えている学生が居ると予測されます。今後、遠隔授業が常態化する中で、そのような学生を特定し支援を届けるために、定期的に科目責任者間で、日頃の授業中の様子や課題への取り組み状況等について情報共有を行うことが有用と思われます。

（これに関しては、既に調査をしてご回答を頂いています。改めて結果を報告いたします）。

\* また、先に述べた「ともべん」の様な、他の学生と共に学修する機会を、自ら求める学生には、オンラインによる「ともべん」または同様の学修支援を企画・実施（既に実施されている教員方も居られます）、活性化することも有用と思われます。

3) 学修における他者（友人、教員）との関わりという点では、遠隔授業に関してはメリットとデメリットの両方の回答が認められました。

- ① 面接授業よりも（一人なので）授業に集中できる。一方、自宅であると孤独で緊張感が無く学修意欲が湧かない。
- ② 教員に質問がしやすい。一方、教員とのコミュニケーションが取り辛い。
- ③ 面接授業と異なり、分からないことを友人と教え合う、確認し合う等の互いに助け合うことができない（故に自主的に進めるしかなかった）。

一方、遠隔になっても分からないことは友人に聞いて理解した、切磋琢磨して頑張った。

→ **対策案**

\* 多くの学生は、遠隔でも他者との繋がりをバランスよく保持しながら、学修を進めていると思われまます。一方、低学年で未だ友人もできずかつ一人暮らしの学生や、従前より他者との繋がりが希薄な学生に関しては、ますます孤立して孤独感を抱くようなことが無いように、支援体制を強化することが求められ、まずは安心して学修に取り組める居場所や心の拠り所となる他者の存在が必要ではないかと思われます。例えば、①感染予防対策を講じた上で、少人数の学生を対象に学内に自己学修スペースを設け他者（友人、教員）と接する機会を増やすこと、②チュータ及び必要に応じてそれ以外の人的リソース（カウンセラー）による支援体制を整備・強化すること等が有り、②に関しては既に学修支援センターで実施してくださっていると思えます。

\* 教員とリアルタイムにコミュニケーションを取る機会を増やすという目的で、オンラインまたは電話によるオフィス・アワー（シラバスに記載した時間枠）を周知することも有用と思われまます。既に各科目単位で、オンラインによる学生への対応を随時実施してくださって

ますが、それとは別にリアルタイムで教員とコンタクトを取り支援を受ける機会として、先の時間枠があることを周知してはどうかと考えました。

4) 教育方法(教材を含む)に関することとしては、遠隔授業の場合は、以下のような理由により、理解が困難になる等の、学修上の支障が生じるという回答が認められました。

- ① 授業の速度が速い(理解が追いつかない)
- ② 授業を受ける際に手元に資料が無い(メモを取るのに必死である)
- ③ 授業中や復習の際に、教科書の該当ページが分からない

(一方「パワーポイントは面接授業よりも遠隔授業の方が見易い」という回答が認められました。)

#### → 対応策

学生は知識を「知ること」に止まらず、「(知って)理解すること」を求めていると思われれます。授業中に全ての内容を理解することを図るのは不可能であります。学生が授業中によりよく理解できるように、また復習の際に理解が深まるように、以下の配慮が必要と思われれます。

- \* 授業の速度に配慮することが必要と言えます。また授業中は適宜、学生への声かけやチャットを用いた双方向のやり取りを行い、即時に対応すべき要望に対しては可能な限りリアルタイムでそれに応じることが求められると思います。またこれを実現するために、講義者を傍でサポートする人員を配置し、チャットの内容を確認したり、対応の必要性和緊急度の判断等を行うことが求められます。
- \* 講義資料を配布予定がある科目では事前に配布するようにします(配布する必要が無い科目もあります)。特に外部講師の先生方には学生のニーズをご理解いただき、資料を早目にご提出いただいて学生に郵送できるように図りたいと考えています。さらに、自己学修の際に配布資料を利活用できるように、資料内容の整備・工夫を行うことも求められると言えます(例:教科書を指定し活用して講義をしている場合は該当ページを明記すること、学修を深める際に活用できる参考文献やその他リソース情報を明記する等)。

5) 教材の利活用として、特に動画については「復習のために動画は常時公開して欲しい」という要望が認められ、一方「常時公開している科目では一時停止しながら復習できた」という、常時公開している動画を自己学修に活用できたという内容の回答が認められました。

#### → 対策案

- \* 動画公開については、学生の学修ニーズ、著作権に関する留意点、科目担当者の意向等を踏まえて検討を進めたいと考えています。特に学生の学修ニーズを踏まえた検討では、まず教員がそのニーズを理解した上で、動画公開の目的・意義、教材の利活用のあり方について話し合い、全教員の合意を図りたいと思います。また、話し合いを行う際には、今回の回答から、学生の状況として以下の点が明らかにされたため、これらを踏まえて検討を進めたいと考えています。

- ・遠隔授業では、通信上の軽微なトラブルや、物理的な隔たりがあることで教員の話す間（ま）や、話すタイミングを上手く捉えることができず、かなり集中力を高めていても、講義中に教員の声が聴き取り辛いことや、話の内容を聞き逃してしまったということが、誰にでもしばしば起こり得ること。
- ・上記のような困難な状況下で授業を受けている学生は、動画を活用してでも、授業の内容を理解したいという学修ニーズや学修への意欲が認められること。

## 6) その他

- ① 自己学修に関しては、時間にゆとりができた（主に、通学時間の削減で自由に使える時間が増えた等の理由による）ことで、自己学修（主に復習）が出来た、勉強時間が増えたという回答が認められました。

### → 対応策

学生にとって時間的に“ゆとり”ができたことで、講義内容を振り返る時間や、自らの学修を内省し深める時間を持つことが可能になったと言えます。このような学生の状況を踏まえ、その学修意欲や本来持つ力をさらに促進・強化するために、講義では（“知識を享受すること”以外に）これまで以上に、授業で得た知識や情報を基により広く・深く看護に関わる現象を理解し内省するための視点（例：現在の社会状況に応じたヘルスケアニーズの視点等）や、広く・深く学修するための方法（例：自己学修に有用な知識・情報等のリソースを探索する方法）を提示し、これらを学ぶ機会をより多く提供することが求められると思われました。

同じく自己学修に関することでは「教科書を読む時間ができた」という回答が認められました。また「自宅では資料・参考書等を調べることができない」という回答が認められました。

### → 対応策

- ・本学では、比較的多数の教科書購入を求めています。ここで改めて、教材として教科書をどのように利活用するのかを、教員と学生の双方が再考する機会にしてはと思いました。
- ・回答に記された、自宅で調べることができない“資料”が何を指すのか、また“調べることができない”とは、調べる方法が分からないことを意味するのか等、学生個々のニーズを明らかにし、それに応じて対応することが求められます。例えば以下のような対応を図ります。
  - a. 自宅で調べることができない“資料”が、図書館内のみで手に取ることのできる書籍や、未だオンライン化されていない最新ジャーナル等を指すのであれば感染予防策を講じた上で、学生が図書館内を自由にブラウジングして良書に出会う機会や新たな知に出会う機会を徐々に拡大する等、後期の学術情報サービスについての検討を進める。
  - b. 自宅においてオンライン・データベースを活用して検索・入手可能な資料を“調べることが分からない”ということであれば、オンラインによる文献検索講座を開講する等、自宅でも可能なリソース探索方法について、再度、学修する機会を設ける。

②科目の評価に関わることとして、前期では筆記試験による評価に代わり、複数のレポート課題が同時期に重なったことに因って「負荷が大きかった」という回答が認められました。

⇒ **対応策**

- ・科目責任者方にシラバスの変更箇所を明記して再度ご提出いただくよう依頼いたしました。後期開講時に、変更後のシラバスを用いて「成績評価方法・基準」他について再度説明し、それによって学生が計画的に学修を進め、課題学修や試験等に向けて準備を進めることができるように図って頂ければと思います。
- ・また後期開講中の課題については、科目責任者間で、複数の課題が重ならないように調整することも必要と考えています（今後、調整を依頼する場合はご協力をお願い致します）。
- ・Webを用いた成績評価（試験）を実施予定の科目では、学生が試験の時に機器操作や解答形式に慣れて安心して試験に臨めるように、試験当日に向けて段階的に準備を進めて頂ければと思います。

③授業中の音声や映像の送受信に関しては、通信トラブルや機器の操作に慣れないことに因って、学修上、負の影響が生じていることを示す回答が認められました。

⇒ **対応策**

前期と同様に、通信環境の問題や、機器操作に困難さを抱える学生に対しては、感染予防対策を講じた上で、学内で受講できる場・機会を設けることを、後期も引き続き実施します。

以上